

昭和63年度

匹見地区県営圃場整備事業に伴う

遺跡発掘調査報告書Ⅱ

平成元年3月

島根県匹見町教育委員会

昭和63年度

匹見地区県営圃場整備事業に伴う  
遺跡発掘調査報告書Ⅱ

平成元年3月

島根県匹見町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は島根県益田農林事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が昭和63年に行った匹見地区  
県営圃場整備事業に伴う、前田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は島根大学歴史学教室及び島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で  
実施した。

調査指導	島根大学法文学部教授 島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第1係長 島根県教育委員会文化課文化財保護主事 島根県教育委員会文化課文化財保護主事	田中 義昭 宮沢 明久 松本 岩雄 鳥谷 芳雄
事務局	匹見町教育委員会教育長 匹見町教育委員会教育次長 匹見町教育委員会派遣社会教育主事	平谷 勉 渡辺 隆 田原 敏明
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	竹田早月、渡辺登美子	
調査参加者	森脇雅夫、栗田 定、栗田 修、宮市民義、溝田福松、森 清、原田祐二、 久保田博万、石原八重子、中村靖子、谷上朋子、斎藤百合子、森脇一枝	

3. 発掘調査に際しては、益田農林事務所の石飛富夫、堀野章氏をはじめ、土地所有者、地元の方々  
に終始多大な協力をいただいた。また、遺物整理にあたっては、島根県教育委員会文化課の松本  
岩雄・鳥谷芳雄氏らの御指導を得、森 清、森節子氏らの手を煩わし、石器の石材鑑定は田中幾  
太郎氏に協力していただいた。

ここに感謝の意を表したい。

4. 本書の掲載図面は、渡辺友千代・竹田早月・渡辺登美子が分担し、執筆は、調査員、事務局が  
行い、(執筆者名は日次および各項末尾に記す)、編集は松本岩雄の指導のもとに渡辺友千代が行  
った。

## 目 次

第1章 調査に至る経過	(渡辺 隆)	1
第2章 地域概観	(渡辺友千代)	2
1. 地理的環境		2
2. 歴史的環境		2
第3章 調査区概況	(渡辺友千代)	5
1. はじめに		5
2. 各調査区の概況		6
3. 各調査区の層位と遺物の概況		6
第4章 遺物概要	(渡辺友千代)	19
1. はじめに		19
2. 出土品		19
第5章 総括	(渡辺友千代)	24
1. はじめに		24
2. 編年的位置		29
3. 遺物と立地		30

## 挿 図 目 次

第1図 前田遺跡の位置	1
第2図 前田遺跡とその周辺遺跡の位置	3～4
第3図 前田遺跡調査区配置図	7～8
第4図 土層断面図(1)	9～10
第5図 土層断面図(2)	11～12
第6図 B 1区平面図(1)	13～14
第7図 B 1区平面図(2)	15～16
第8図 土器実測拓本図	18
第9図 出上遺物実測図	20
第10図 石器実測図(1)	21
第11図 石器実測図(2)	22
第12図 木器実測図	23
第13図 土層断面遺物投影図(1)	25～26
第14図 土層断面遺物投影図(2)	27～28

## 図 版 目 次

- 図版 1 1. 前田遺跡と周辺地形の鳥瞰
- 図版 2 1. 発掘調査前の遺跡全景（西側から）  
2. B区除草作業風景
- 図版 3 1. 西側からB区地点を遠望（手前の田地はA区地点）  
2. 遺物出土状況（B 3壁側から中央ベルトを挟んでB 1壁側方向）
- 図版 4 1. 作業風景（B 6壁からB 9方向を見る）  
2. 作業風景（B 2壁からB 1地点を見る）
- 図版 5 1. 打製石斧出土状況  
2. 繩文土器出土状況
- 図版 6 1. B 1地点側からB 2地点を見る  
2. B 2地点からB 1地点を見る
- 図版 7 1. A 1区（南側から）  
2. A 2区（南側から）
- 図版 8 1. A 3区（南側から）  
2. B区のB 1壁
- 図版 9 1. B 1区砂礫層（B 2壁を見る）  
2. 雨による浸水状況
- 図版10 1. B 1地点のB 9壁  
2. B 3壁からA 1壁方向を見る（南東から）
- 図版11 1. 繩文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器  
2. 上部器, 土鉢, 陶磁器
- 図版12 1. 石 器  
2. 石 器
- 図版13 1. 木札・種子・貨銭  
2. 木 器

## 第1章 調査に至る経過

匹見町では、昭和62年度を初年度として県営圃場整備事業が行われており、それに伴って埋蔵文化財調査を行っている。とかく文化財保護に至っては開発か保存かを問われているなかで、今回の調査が最初で最後になる可能性が大である。そんな中、今回の調査は文化財の保護の重要性を住民に理解してもらうと同時に匹見町の歴史を学ぶ折角の機会でもある。匹見町の財産として保存する為にも調査が後悔やむことの無いよう行政として十分な対応をしていきたい。

昭和63年4月に匹見町文化財保護専門員として教育委員会に専任の職員を迎え調査体制を整えたがら島根大学・田中義昭教授、島根県教育庁文化課の指導をいただきながら本格調査を行った。

昭和63年度の本格調査は、昭和63年5月に実施した紙祖地区圃場整備事業分布調査によって確認された前田遺跡を調査した。9月16日から11月10日まで行った本格調査では、215m<sup>2</sup>の発掘を行い250人役を要した。300余点の石器・土器などが出土した前田遺跡は、河岸段丘上であり比高差が少ないといため、乱流地であって遺跡の性格は把握しにくいが、縄文後晩期から奈良時代へかけての複合遺跡と推察される。遺跡の発掘が終って、昭和63年11月21日より、平成元年3月にかけて匹見町文化財調査室において遺物整理を行った。

指導の先生及び土地所有者の斎藤静枝さん、事業主体である益田農林事務所、作業員さん他、関係者の深いご理解ご協力により前田遺跡の調査が早急に終了したことを感謝しております。今後の調査を進めていくなかで、先住民の集落跡等の発見を期待し、文化財保護に向けての意識の高揚を図りながら、出土した埋蔵文化財の公開と文化財研修を一層進めていきたいと念じております。

(渡辺 隆)



第1図 前田遺跡の位置

## 第2章 地域概観

### 1. 地理的環境

島根県美濃郡匹見町は、中国地方の骨格をなす中国脊梁山地の西端に位置し、広島・山口の2県に接する。広島県境をなす北東—西南に走る脊梁は、1,300m～1,000mの標高をもつ山稜が並列し、また他方とも標高1,000m～700mの山波をもってとり開み、1つの谷盆地を形成している。

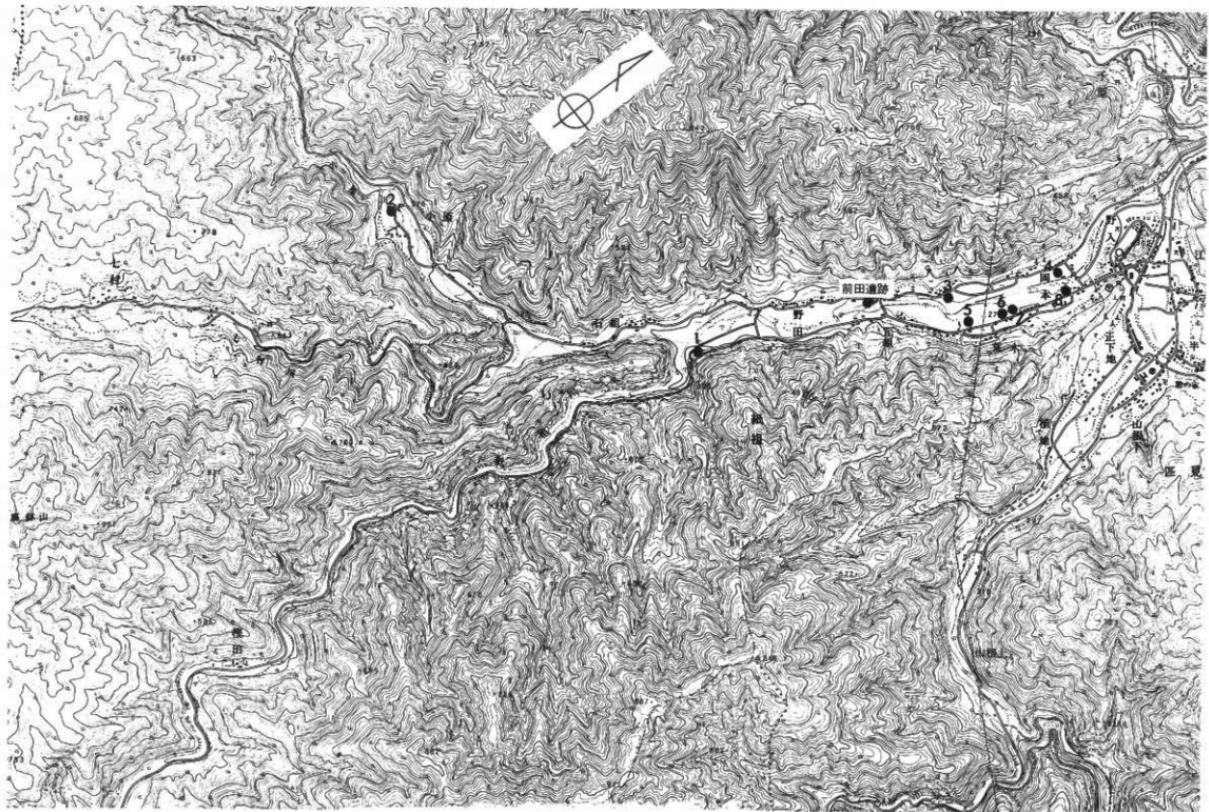
特に北東—南西に走る地質構造線(断層谷)が発達する該地域は、これに直交する線状に切り刻まれた地塊で河谷を一層複雑にしている。つまり高位地では北東—西南に沿うが中央部を中心とした低位地(標高約260m)では、北西—東南に切り込み、したがって河川もこれに従って流下する。

こうした断層地塊の深凹を形成する該地域では、人文活動域はもっぱら匹見川・文流域を中心とした狭小地の谷平地であった。しかし住吉は、96%の林野が重要な資源地であった。特に仙人や木地師は生活の糧を山地に求め、製炭も行われる一方、豊富な山林は藩制期の鉱業を盛んにさせた。またV字谷の傾斜地では楮・三桻などが焼畑農業とともに行われ、殊に今日では、温帯林を主体とした豊富な広葉樹林帯下で椎茸・山葵などの栽培が行われている。

紙祖川が東面を北東流する前田遺跡は、匹見町大字紙祖字野田に所在し、西面を下平山(749m)がひかえる水田域に立地する。該地域は、中生代白亜紀に成る北東—南西方向に走る断層地溝帯によって形成されているため、両端を地盤山地が挟むように並走し、その間を縫う河川は、断層谷を河岸段丘を形成しながら嵌入蛇行して匹見川と合流している。しかし標高約281mを測る本遺跡の周辺は、山裾から緩傾斜のまま紙祖川に派生し、また東面は紙祖川が河食でせまっているため、比高差は5mを測るにすぎず、狭小である。したがって頻繁に溢水による氾濫地であったと想定され、また山脈の伏流水が沼沢地を形成し後背湿地帯に立地している。

### 2. 歴史的環境

本地域(紙祖地域)は、地名が示す如く石見半紙発祥の地で藩制期には製紙が盛んであった。そのため断層谷による狭長な該地では、急峻な斜面に焼畑と連鎖した楮・三桻が植られ、ソバ、コニャクの生産も盛んであった。また西村と称された藩制期には、益田領匹見組に属し代官所が、戦国期には匹見に割拠する土塹を統治した歴代の霸者たちが最平坦地を一望できる本地域の石組に居住していた。平安末期～鎌倉期には「匹見別府」の名で史料に散見されていることから、当地域は国衙領であったらしく、荒木地区にはその莊官の給分である“公文給”的地名がある。



第2図 前田遺跡とその周辺遺跡の位置(1. 石ヶ坪 2. 家廻り 3. 善正町 4. 前田尻 5. 長グロ 6. 水田ノ上・槍田 7. 木戸開中 8. 福田ノ上)

1:25,000

本地域の原始・古代を一望すると、本遺跡の南西（紙祖川上流）0.5km河岸段丘上に縄文中期～縄文後期を検出する石ヶ坪遺跡が存在し（第2図1）、さらに2km上流（紙祖川支流の小原川）には、縄文晩期を検出した家ノ廻り遺跡（第2図2）がある。また1km下流の岡本地区には土師器・須恵器を検出した善正町遺跡（第2図3）、さらに下流の前田尻遺跡（第2図4）では縄文後晩期と想定される遺構が検出されている。特に試掘坑の小範囲から検出された7点の土器（打製石斧）をはじめとして、掘立柱と想定される柱穴などは住居跡として注意されている。その対岸の段丘地である荒木地区では、小ピット・土坑とともに多くの土器や、磨製石斧・勾玉・石鎌などの石器類をはじめ紡錘車型土製品、また口唇部にリボン状鱗状突起をもつ浅鉢形の精製土器など九州との交流を想起させた水田ノ上遺跡（第2図6）が存在する。付近には類似時期の榆田遺跡が接し、木戸開中遺跡（第2図7）では縄文後晩期、弥生、古墳、奈良、平安の各期の遺物が出土している。特に弥生前期の特徴をもつ土器は、稲作開始を想定せるものとして、木器などの検出とともに貴重であった。福田ノ上（第2図8）では、縄文晩期に比定される突帯文土器や弥生土器なども出土している。また古墳～奈良平安のものとしては、長グロ（第2図5）・下正ノ田などの遺跡が分布している。

（渡辺友千代）

◇注(1)『島根県の地質』島根県 昭和60年8月発行

### 第3章 調査区概況

#### 1. はじめに

前田遺跡は匹見町大字紙祖イ882-1番地に所在する。本遺跡の現地表面は、B地点で標高281.310m、A区地点（A3）で281.640mを測り、約33cmの高低差がある。A区調査地点は、遺跡の拡がりを確認するために試掘したもので、△1区（7m×2m）、A2区（2m×2m）、△3区（2m×2m）とした。また、B区は昭和62年度から始まった匹見地区県営圃場整備事業に伴って行われた分布調査によって、遺跡として確認された地点であった。B区は2m×2mのグリッドを描げていく方法で行ったが、このうちB2と呼称する地点は人調査区を設定して全面掘りとし、合計191.75m<sup>2</sup>を対象とした。調査期間は昭和63年9月7日から11月5日までを要し、遺構は検出されなかったものの、縄文土器片・弥生土器片をはじめ、多量の土師器や石器等が出土した。

## 2. 各調査区の概況

調査にあたって、遺跡の拡がりを把握するため、まず南側の平坦地の水田地に調査区を設けることとした。磁北を主軸として任意にA 1と呼称する7m×2mの調査区を設定し、そこから南へ10m延長した地点にA 2(2m×2m)と称する区を設けた。その西側は伏流水による湿田地ではあったが、山裾に接しており、遺跡が存在する可能性があったので90度振り、さらに15m地点に2m×2mのA 3と称する調査区を設定した。

B区と称する調査地点は、標高281.320mを測る畠地にあって、北西面は1m余りの石垣(一部はコンクリートによる)を築き、20m南東は比高3mの石垣をもって紙祖川に落ち込んでいる。遺物は北西面(町道七村線)に沿う地点に既に分布調査によって確認されているので、調査区をその地点を中心に変則的に設定することとした。したがって、B区の主軸は磁北に合わせることが出来ず、南西—北東を主軸とし、地区・地区壁呼称は「第3図 前田遺跡調査区配置図」に示している。B区の発掘は、グリット法を中心に行なった。つまり、B 1区を小グリット(2m×2m)ごとに幅50cmのベルトを設け、南西—北東(B 1壁面)に6区(14m50cm)、北西—南東方向に4区9m50cm、全体的に24区を設定した。3層で西南—北東と北西—南東に走る中央ベルトのみを残して4区とし、地山まで掘り下げたが、B 2区は小範囲であったので小グリットを設げず平面発掘の方法をとった。

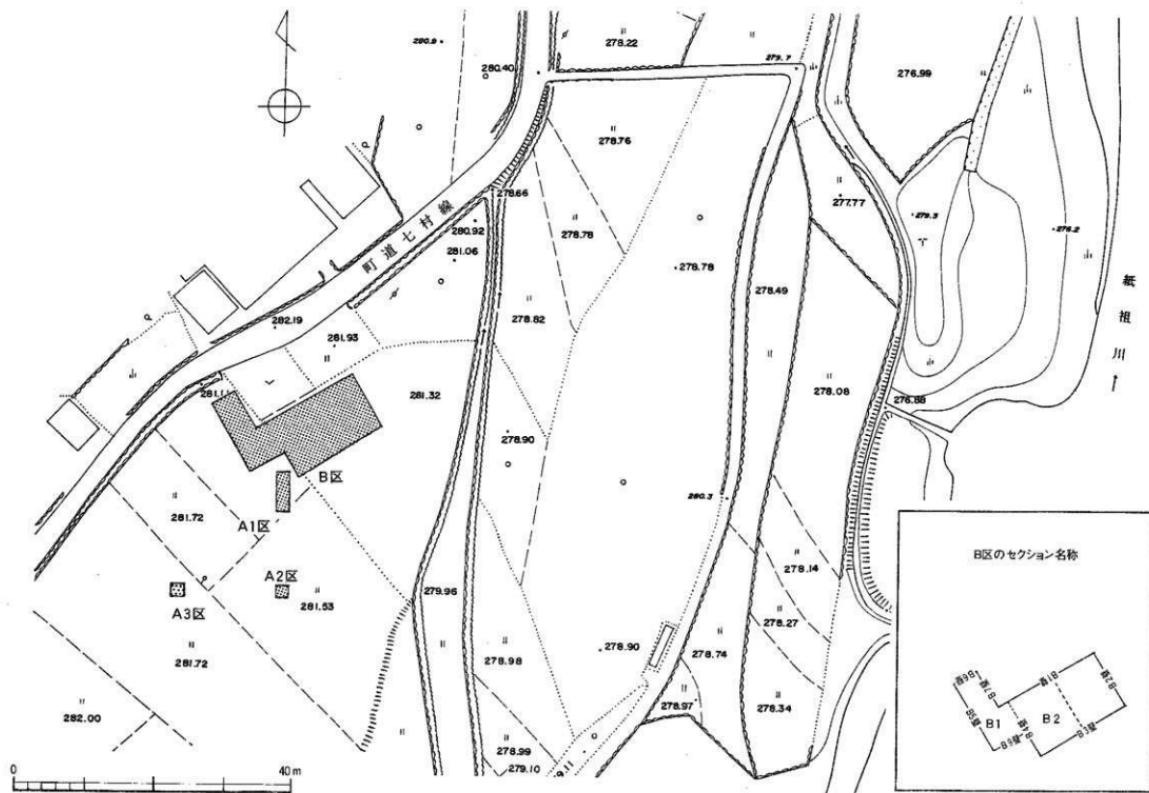
## 3. 各調査区の層位と遺物の概況

### A区

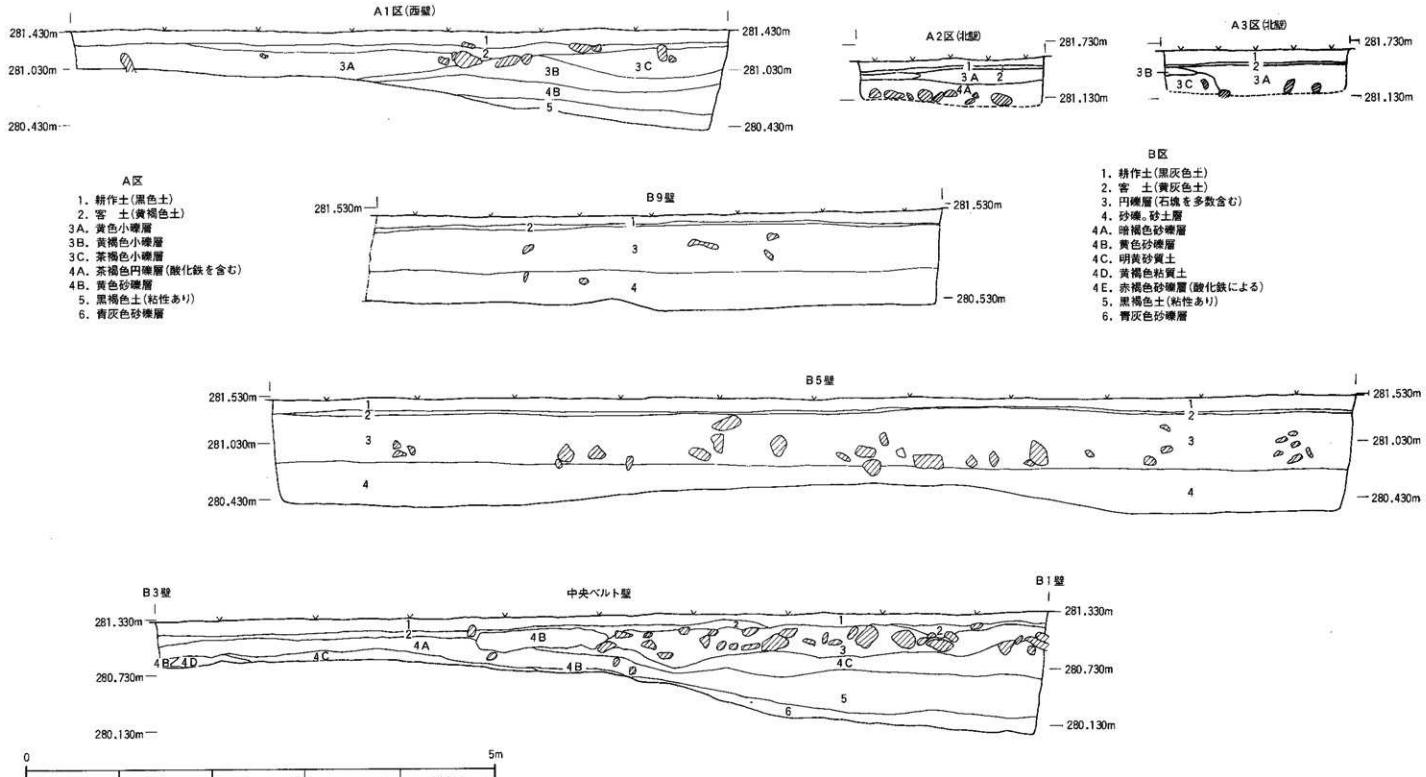
A区は、平面発掘(B区)地点の上側(南側)に接し、20cm~40cm高いレベルである。

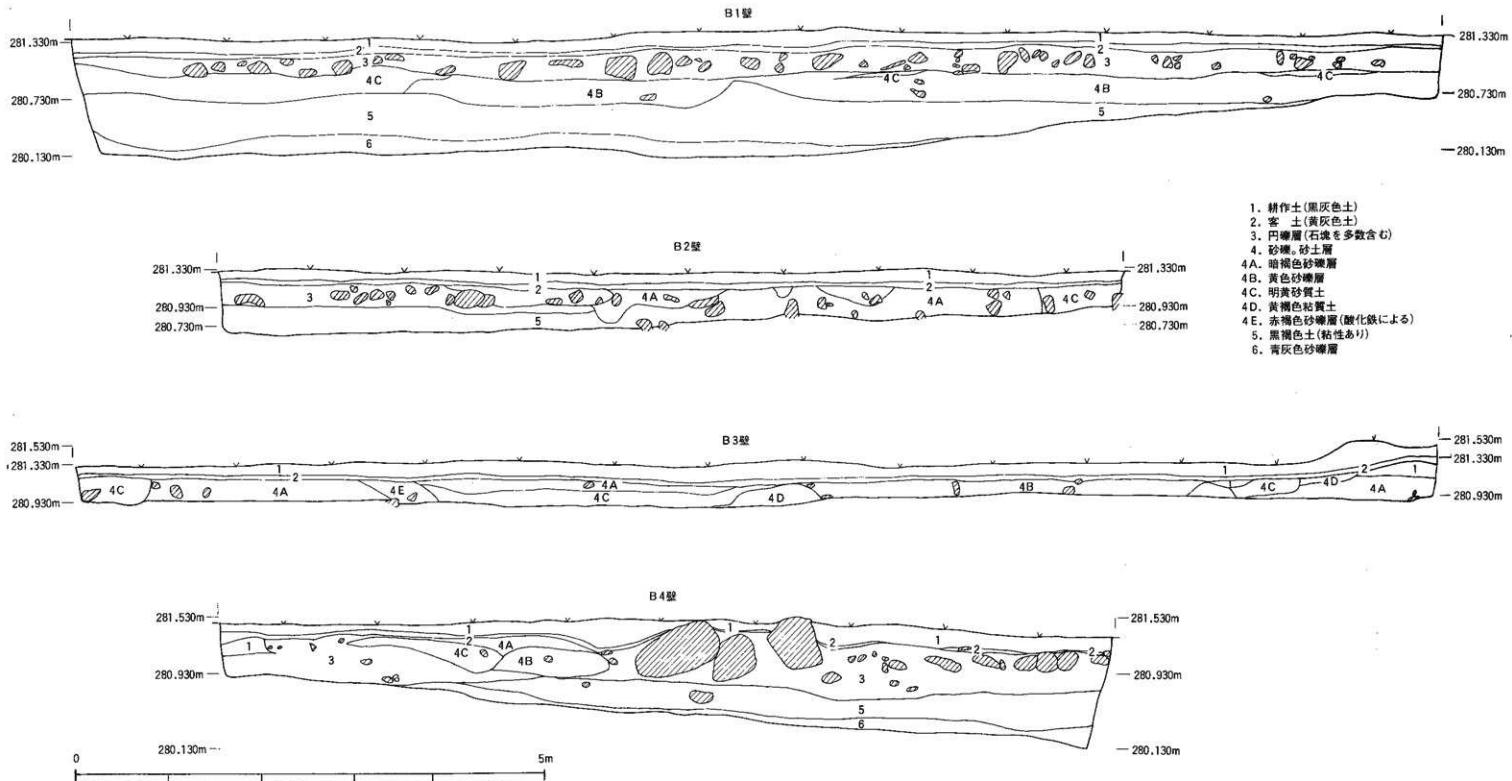
南東面は紙祖川側に5mの比高をもつ河岸段丘を形成して緩傾斜地となっているため、乾田となり、また山裾側は伏流水による湿田で、乾湿差のはげしい地点である。

A 1区 最もB区に接する区であるため、層序や土質はB区に似る。1層は、耕作土で約15cmの層厚があり、砂粒を含んでるので黄褐色を呈している。2層は客土で、黄灰土である。西壁を見るかぎり、中央部において、河流の嵌入と考えられる微量の砂礫の混入が下位にあって陥入する。この層は北壁面は層厚的には用途を満たしているが、南壁に向かっては次第に薄くなり消滅している。3層は、色別する限り三様に細分できるが、土壤質からは一連性のものと想定される。つまり小礫層として一括できるものである。しかし層の不安定さは旧く紙祖川による擾乱的溢流によったと考えられるが、安山岩質の石器1点の出土は、層序よりむしろ平面的拡がりから捉えた方が良いかも知れない。4層は、黄色砂礫層で約20cmの層厚があり、比較的水平に堆積する。

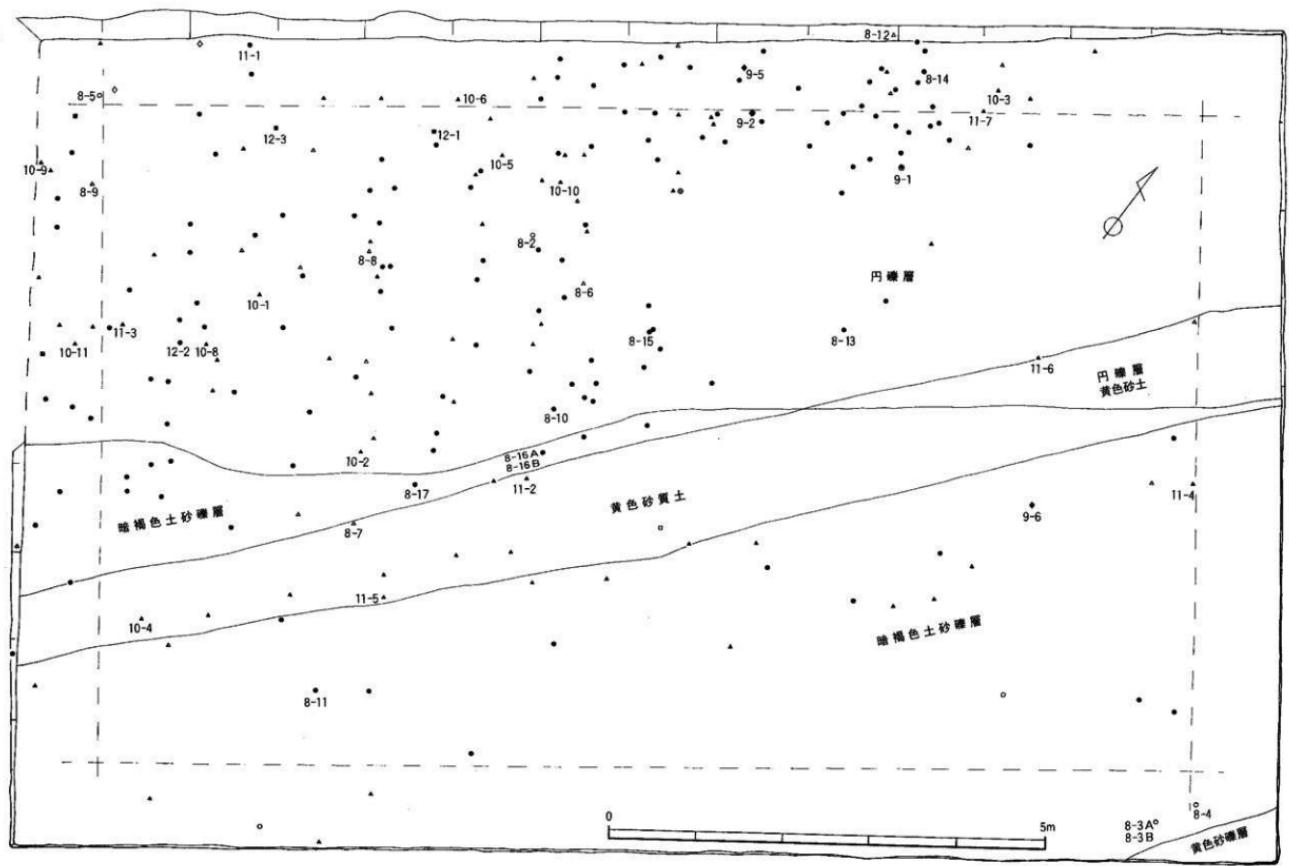


第3図 前田遺跡調査区配置図



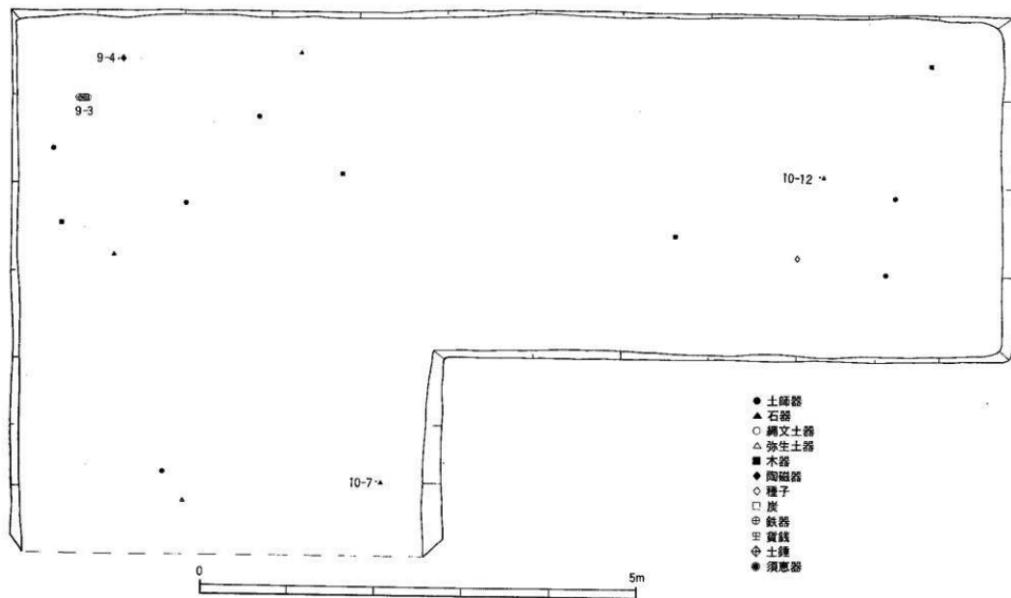


第5図 土層断面図(2)



土壤名は3-4層(標高約281.030m)の状況を示す  
破線は、土層断面追跡剖面図を示す(壁より1m)  
凡例は、第7図(2)を参照

第6図 B1区平面図(1)



第7図 B1区平面図(2)

この層からは土師質器片や石器・条痕地の縄文土器片の3点が出土した。後述するB区でも東面は層序的には異なるが、類似する砂礫層直上に出土している。実質的には本区の地山と考えられる。5層は粘性の強い黒褐色を呈する泥炭層である。4層以下はいずれも層厚が北西面に遅在しているのは、旧く北西面（山裾側）に湧水、あるいは紙祖川の溢流によって渦が形成されていたことが想定される。以下青灰色土の河床疊となる。

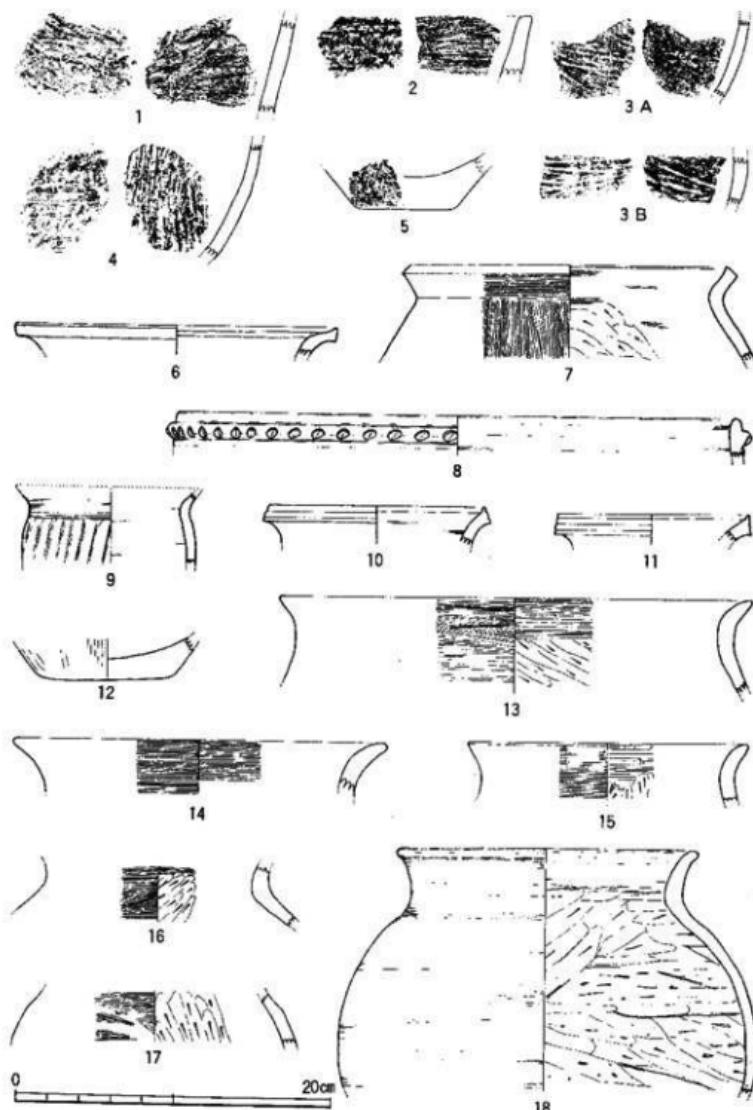
A2区 A1区より10m延長した地点にあって、現地表面標高は281.560m測り、2m×2mのグリット。1層の耕作土は淡黒色で、6~10cmと比較的薄い。2層の客土は黄褐色土で砂質。3層は、概ね小疊層であるが、部分的に砂粒を含む。東壁側（紙祖川側）は18~20cmの層厚で陥入んでいるのに対して、西壁側は2~3cmと薄い。4層は、人頭大の円疊が重層し、実質的には河床疊。3層との層界のレベルは西壁面標高281.220m、東壁面281.310mを測り、僅かに紙祖川に傾く。地表より52cm掘り下げる。遺物はない。

A3区 A3区は南北の主軸に対して、A2区から直角に西側に15m振った地点に2m×2mのグリットを設定した調査区である。現地表面標高は約281.690mで、両端標高に2cmの差がある。つまり東面（紙祖川側）が低い。表土は湧水をおび、やわらかい。下層に湧水帯があるものと思われる。1層は黒褐色の耕作土で層厚は20cmあり、A2区に比べて厚い。2層は砂質で黄褐色を呈し、粘性がある。2~3cmの層厚で比較的水平。3層は湧水をおびた小疊層であるが、中には人頭大の円疊が露山。レベルでいう標高281.350m以下は4層に相当するのかも知れないが、小疊が大半を占める。湧水が多いのは伏流水による湧水帯が下層に形成されているものと思われる。自然層で遺物はない。

## B区

B区は、現地表面標高281.290mを測り、高位はA区側（北西面）の281.510m、その高低差は30cmある。設定は、道路面（北東—南西）を主軸に14m50cm、縱9m50cmの長方形としたが、掘り下げの段階で北西面に遺物の多出をみたので、石垣をとり囲む形でL字に入り込む部分を設定した。したがって調査面積は193.75m<sup>2</sup>で、便宜上前者をB2地点、後者をB1地点と呼称することにした。以下、地区・地区壁呼称は「第3図 前田遺跡配置図」に従っていくことにする。

B2地点 烟地であるため表面は凸凹している。1層は黒灰色を呈した耕作土で、小砂疊を含む。層厚は8~20cmのばらつきがある。耕作によって露出したと思われる打製石斧が1点出土。2層は客土で、全般的に黄灰色の砂質性のもので、一部に耕作土の嵌入部分、または3層への陥入によって尖滅した部分もある。B3壁寄りに数点の石器剝片が出土。3層は大半が円疊（人頭大から5,60cm）であるが、B3壁寄りは砂疊を多とし顯著でない（第6図 平面図1を参照）。遺物は縄文土器数点に合わせて、土師質土器の小片、石器剝片がB3壁寄りに偏して出土。平面的に見ると、B1



第8図 土器実測拓本図

壁に沿う円碟群は、北東—南西方向に走り、それに沿ってB3壁へ黄色の砂質土、そして暗褐色砂礫層と並行する。当初、円碟群は紙祖川の溢流による流石とみていたが、下位層での遺物の多さ、また土壤の性質から旧く造田時に敷き詰めた石群であると判断された。つまりB1壁寄りの下層は、水成土壤で形成されているのである。したがって4,5層でも繩文、弥生の遺物とともに近世の貨銭や陶磁器が混在しているのである。またその円碟層群は、レベル的上下差が少なく、5層の黒褐色の泥炭層上に一致している。4層は砂質層であるが、碟を含むもの、あるいは粘性度、色調などから5種に細分した。しかし相互の混入、あるいは嵌入、陥入などによって複雑化し層位的に捉えることが難しいが、平面的にはある程度の状況を把握することができる。つまり「第6図 平面図1」にあるように、ある平行性をもった帯状として捉えることができる。その方向は東北東—西南西で、紙祖川の流下方向と一致する。この帯状の重なりは、紙祖川の嵌入痕跡だろうと考えられる。

(渡辺友千代)

◇注(1) 『中国地方地学事典』「四見層群」中国新聞社 昭和62年発行

## 第4章 遺 物 概 要

### 1. はじめに

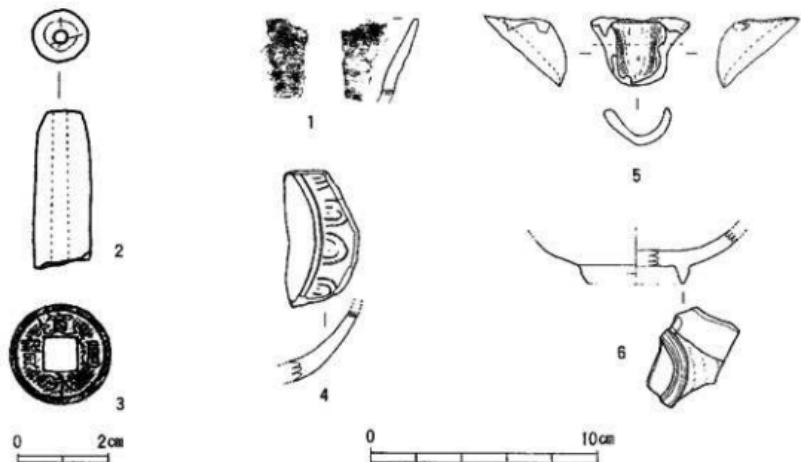
土器は小破片を含めて約230点、そのうち繩文土器片8点、弥生土器片11点、陶磁器15点、須恵器1点が出土し、残りの大半は土師器質土器片であった。検出された石器は56点で、そのうち1点に黒色調の黒縞石剝片がある。また木器7点、種子4点、貨銭1点、鉄滓1点、木札1点などが出土。しかし平面図「第6図(1)・第7図(2)」に表示された点数とは一致しない。それは同質的近接したものをお括して採り上げた結果による。

### 2. 出 土 品

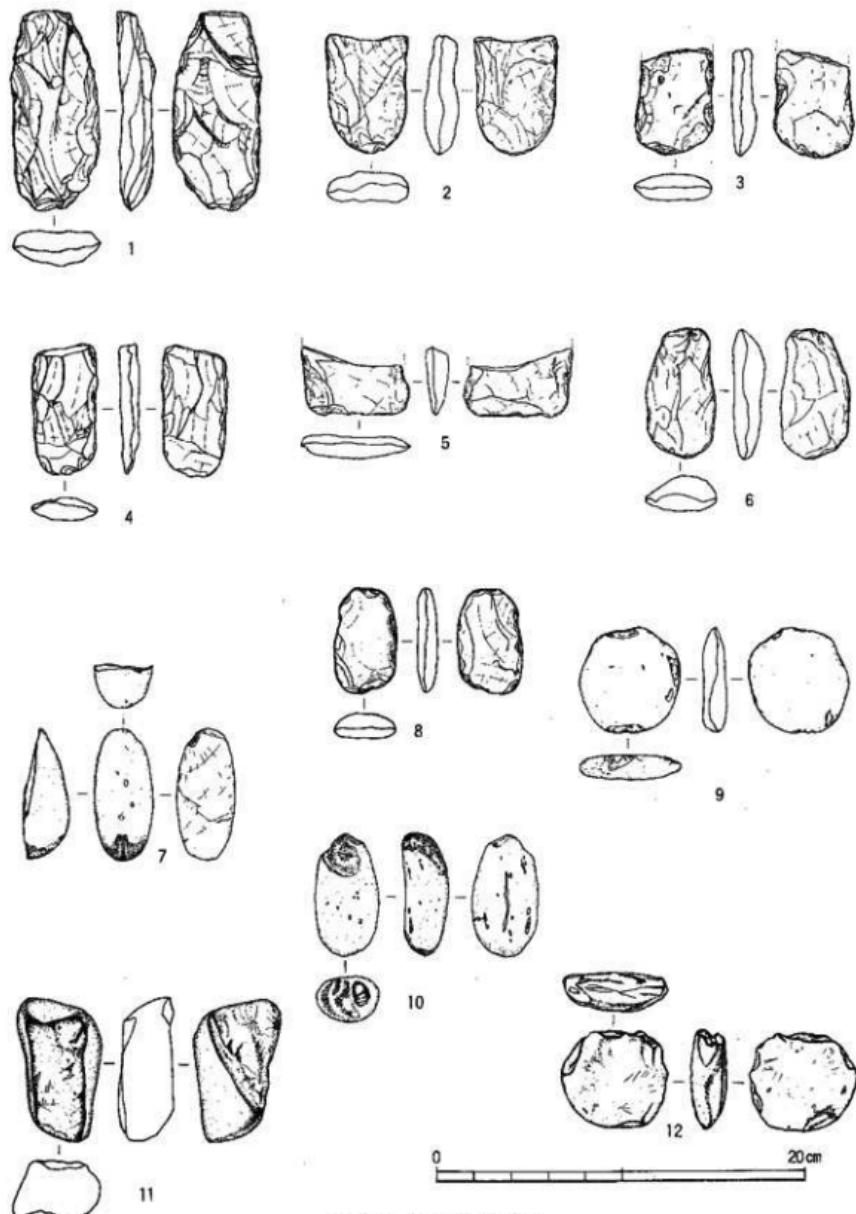
繩文土器 「第8図 土器実測拓本図参照」今回の調査では8点の繩文土器が検出され、そのうち一片は口縁部で、残りはいずれも胴部の破片ばかりで、1個体にまとまるものはなかった。したがって、少量から型式的特徴、時期的にも把握することはできなかった。A1区の3層と4層に各1片づつ、B区では6点が2層、4層を中心に出土した。平面的には東側(紙祖川側)に偏在している。

1は粗製深鉢系の縄文土器で胴下半分と思われ、淡茶褐色を呈し、内外に条痕を施す。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。2はB区のB3壁寄り3層下半から出土した縄文土器で、口縁部。外に直行し、口唇部は平坦。内外に条痕を施すが、内面は顯著でない。灰茶色を呈し、焼成良好。3A・3BはB3壁寄りの客上直下で出土。3Aは胴下半部分と思われ、外面に条痕を施し、内面はナデ調整。3Bは内外とも条痕を施し、両面とも煤が付着。4は、内外とも条痕で煤が付着し、胎土に石英粒子や3mm大の砂粒を含む。酸化鉄の付着によって赤褐色を呈す。

弥生土器 「第8図 土器実測拓本図参照」弥生土器は11片出土した。そのうち口縁部を中心とする型式的特徴をある程度うかがえるものを7点図示した。いずれもB区に検出されたもので、その大半は5層の泥炭層である黒褐色で、疎開的まとまりのない状況で出土する。平面的にはB1壁寄り(西面)に分布し、縄文土器分布とは対照的である。6は淡橙色を呈し、内面に縦の刷毛目の後内外とも横撫で。7は、張りぎみな胴部からくの字形に反転した口縁で、径に比べて薄い。外面の頸部下半に縦の刷毛目調整を施し、口辺部下半は横に刷毛目調整。内面は頸部下半に笠削り、口唇部にかけて横撫で。焼成良好で黄褐色を呈し、胎土はきめが比較的細かい。8は当初、縄文晩期の所産と考えていたが、突帯があるものの仕上げ過程、表面調整等及び型式的特徴から弥生土器とみた。突帯は貼り付けで、上部は棒状施文具で押引きしたように区画するが下部は撫でのみ。口縁上端面は円状で僅かに外傾する。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好。形式的・時期的位置付けについては、浅学のため差し押えたいが、管見によれば九州でいう前期後半に比定されている下城式土



第9図 出土遺物実測図

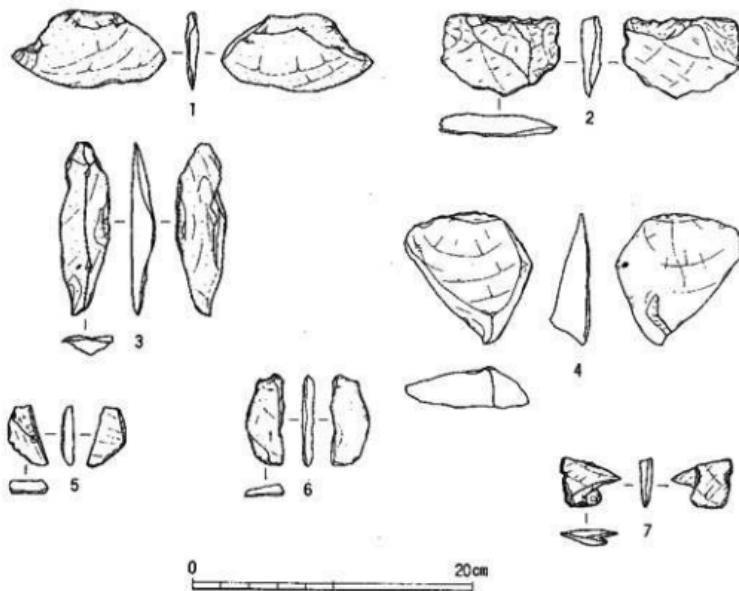


第10図 石器実測図(1)

器にみられる。9は、外面頸部に顯著な横撫で調整がみられ、その下半は範削りをした後刷毛目仕上げを行っている。内面は頸部下半に範削り調整の後、横撫で。胸部に煤が付着し、胎土には2, 3 mm大の石英粒子が混入。10, 11は口縁部片で、端部がわずかに広くなり、数条の沈線を施し、撫で仕上げ。胎土はきめ細かく、黄褐色を呈し軟質。12は低部で、外面に紙の刷毛目調整を施す。内面は範調整。胴中央部に向って張り気味の兆候がみられる。

**土師器** 「第8図 土器実測拓本図参照」土師器は200点余り検出されたが、型式的特徴がうかがえるもの、あるいは出土数から遺跡の性格が捉えられることができそうなものを、極力選んで図示した。土師器は、A1区、B区(B1+B2)に出土し、大半は4層に嵌入するが、それ以外は1層の耕作土以外の層から出土。本遺跡が水成土壤下に立地していることを暗示させる出土状況といえるだろう。

13, 14の口縁部はC字形に外反し、端部は外面に垂れ下がり気味であるが、15のように尖がり気味のものもみられる。いずれも撫で仕上げであるが粗い刷毛、範などの施文具の痕がみられ、また



第11図 石器実測図(2)

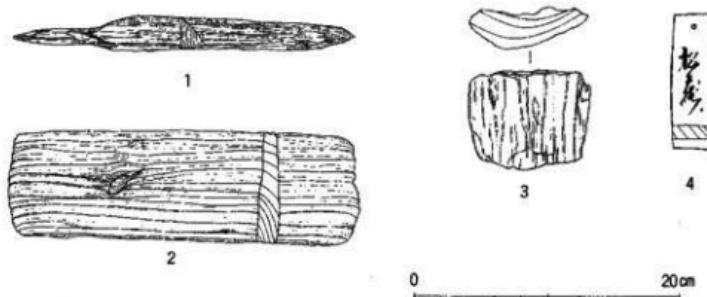
内面では頸部下半まで顯著な笠削りを施すものが大半。16は肩部外面に數回の笠調整の後、横撫で。18は煮て、胸部からC字形に口縁端部に至り、口縁部は外面に垂れ気味。外面全体に笠磨きを施し、胴中央に煤の付着によって黒褐色を呈すが、黄灰色で焼成きわめて良好である。

須恵器・土錘・陶磁等 「第9図 出土遺物実測図」1は須恵器で4層直下に1片のみ出土。体部はやや外傾して立ち上がり、内外を横撫する。2は土錘で、4層直下から出土。外面には赤彩が施されている。3は鏡貨でB1区の5層下部で出土し、「寛永通寶」とあり、裏面には刻印はない。4～6は陶磁器で、4は高麗青磁。淡青色の素地に施釉し、貫入がみられ、文様は花輪の象嵌が施されている。5は黄土色した片口で無釉で、外面の素地は粗く茶褐色を呈し、文様的に白釉を施す。6は唐津系の陶器。

石 器 「第10図 石器実測図(1)」「第11図 石器実測図(2)参照」石器は総数56点、全重量8,046gとなり、1点あたり約143gとなる。石材は大半が安山岩で、中には粘板岩・頁岩なども混じる。図示したものは加工が顯著であるものを中心としたが、石器の特徴を把握するため各種を抽出した。

石器出土状況をみると、平面的にも垂直的にも人為的意図は見出せない。したがって層位的に捉えたとしても、あまり意味をなさないかも知れない（水成土壠下の攪乱的立地による遺跡の性格から）。

(1) - 1～8は、打製石斧あるいはその片である。全体的に粗くつくりあげているが、均整がとれ、器長15cmを測る(1) - 1などは僅かに弧状をなす。また輪郭は刃部を中心に丁寧に剝離調整する。(1) - 7は粘板岩質の半礫した磨石で、端部に擦痕がある。(1) - 9・12は安山岩質の石錘。10



第12図 木器実測図

は敲石と思われ、両端に潰痕をもちその一端は欠損する。風化がはげしい。(2)-1は石刃状剝片で、器長5.4cm、器幅10.8cm、重さ56g。上端部に打点がみられ、加擊が器体から刃部に至り刃稜をつくる。(2)-3は横長状剝片の背面上端に打点、打瘤がみとめられるが、腹面の外側には打点剝離面があって、横はぎの打碎を見る。(2)-4は上端の尖平部に打点、その加擊力で単一の打碎したことがよみとれる。したがって上端の剝離は、調整剝離というより加擊痕で、扁平石核といえる。(2)-5~7は剝片石器で、材質は安山岩。そのうち5・7はガラス質安山岩で、スクレーパー型状に細部調整を加え、7は両面の縁部に連続剝離調整を施す。

本器ほか 「第12図 木器実測図参照」木器・木札・種子等はB区(B2)のB1壁寄りの5層を中心出土。そのうち木器については7点で、うち人為的加工が明らかと思われる3点を図示した。木札はB区(B1)の4層で、種子1点も出土。鉄錐は、B区(B2)のB1壁寄りの3層下位で出土した。

1は杭で、断面は△形を呈す。片端は加工工具による数次の削痕がみられ、細く尖らせる。またその上端は腐蝕によって傘状に欠損する。2・3は両端を加工工具による切痕としてよみとられるが、その使用目的または樹種とともに判らない。4は木札で長さ10.2cm、幅3cm、厚さ0.7cmを計る。樹種は杉で、表は削りムラがあり、チョウナ仕上げと察せられる。上端部に0.4cmの円孔が施され、その下半にかけて「松藏分」と読める墨書きがみられる。背面もチョウナ仕上げによる波打ちがみられ、下端部に斜行の鋸目がとおる。

(渡辺友千代)

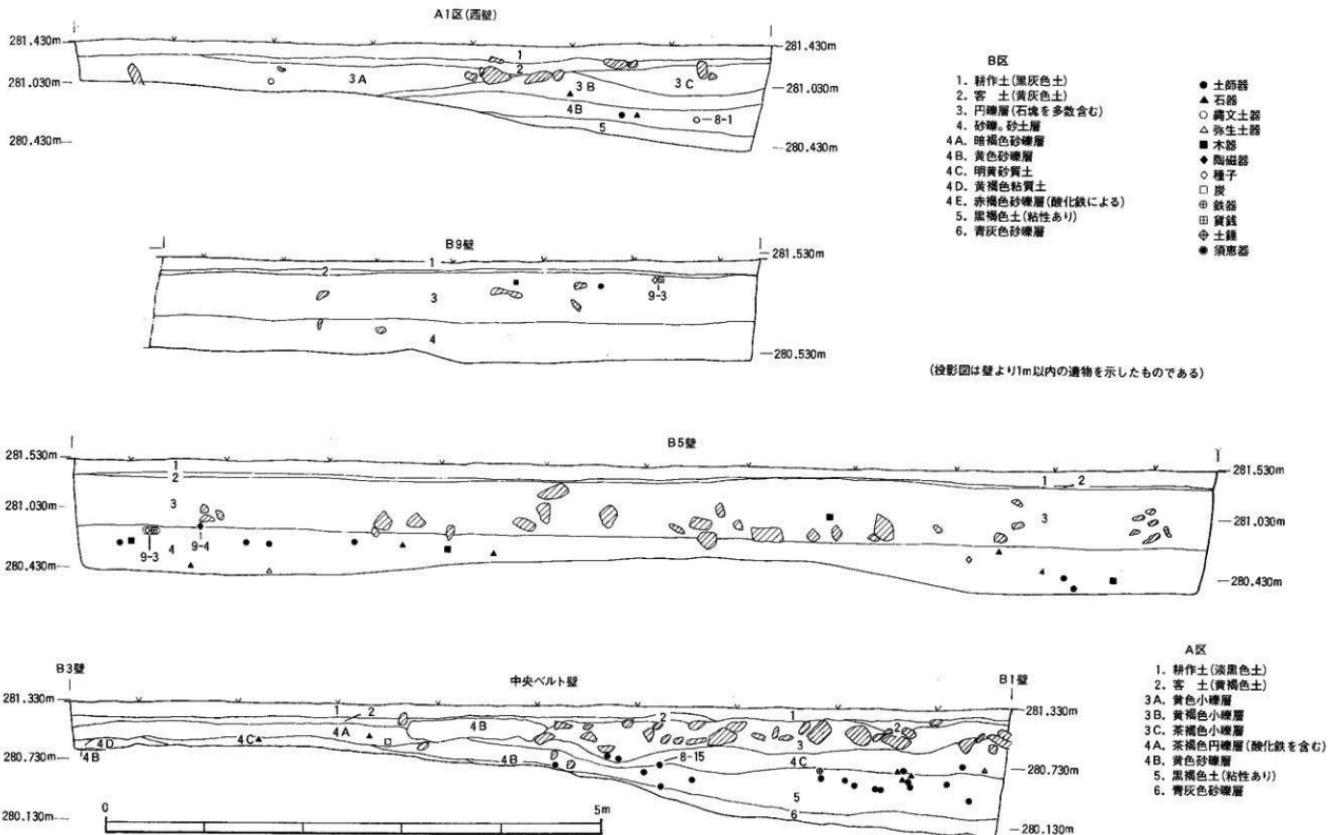
◇注(1) 『苏生土器I』「九州」佐原 真編 ニューサイエンス社発行 昭和58年5月

## 第5章 総括

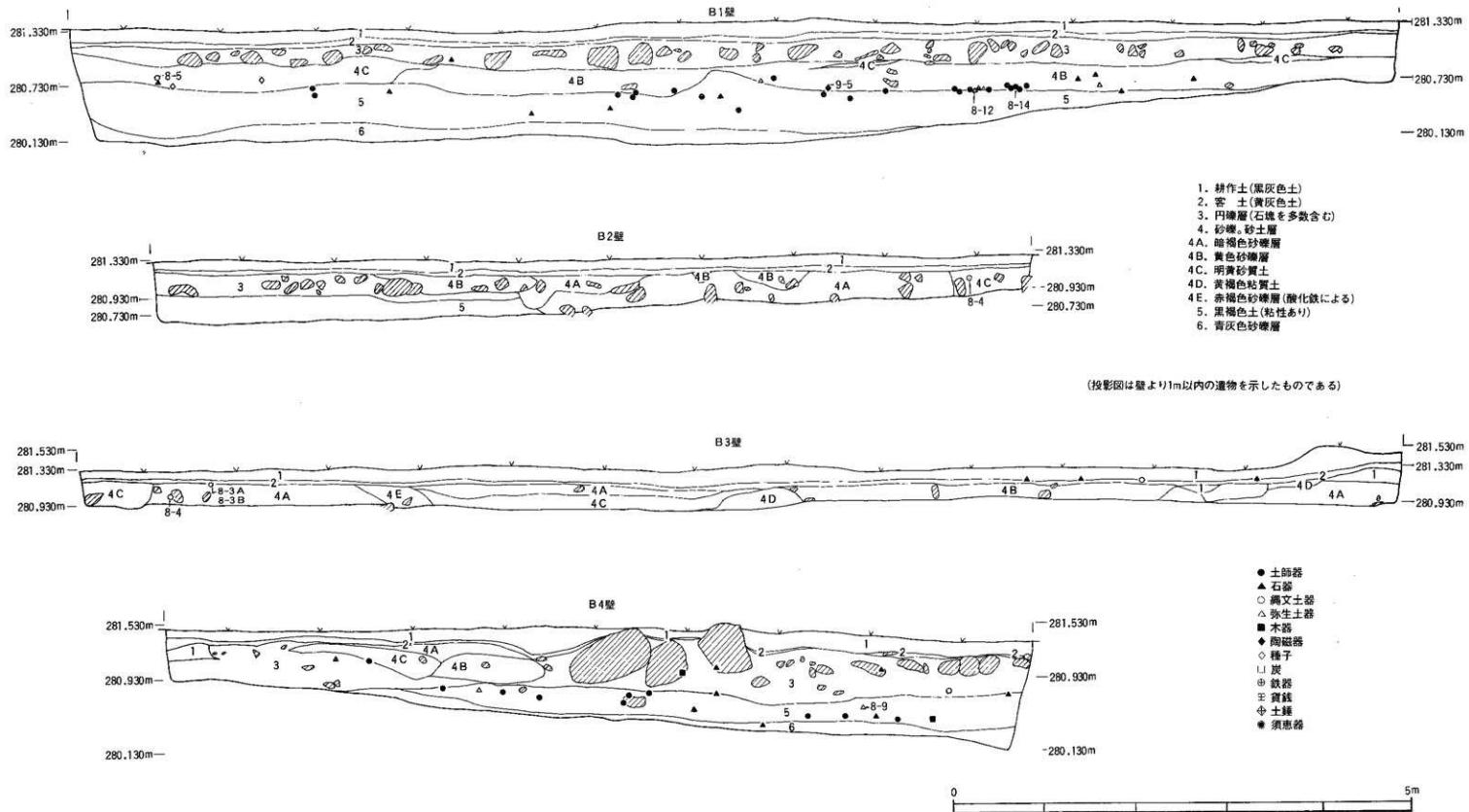
### 1.はじめに

今回の発掘調査では、地形的立地によるネックがあった。それは本遺跡が沢地地形に形成されたもので、溢流によって層位的攪乱を受けた遺跡であるということである。

したがって、比較的多数の遺物が検出されたにもかかわらず、原則に則った層位的な把握ができなかった。それは、遺構を伴わない遺物ということで、しかも層位的上下関係が遺物の年代を正確に示していないことを物語るものであって、土器編年をより不可能にしたともいえる。こうした難点を補うために、平面分布図を試みたが、勢いそれは本遺跡が攪乱地形に立地していることを浮彫



第13図 土層断面遺物投影図(1)



第14図 土層断面遺物投影図(2)

りにしたことを証明したに過ぎなかった。つまり遺物密度が沢地範囲と一致するということであった。それはそれなりに本遺跡の性格を描き出すものとして意義はあったと思われるが、層位的土器編年等の解明の挺子とはなっていない。

## 2. 編 年 的 位 置

もっとも多く出土した遺物は、土師器であった。大半は球形を呈し、器肉は全体に厚く、しかも頸部は特にぶ厚い。こうした傾向のものは、須恵器盛行期の土師器にみられる形態的特徴で、須恵器第3期、4期<sup>①</sup>の所産かも知れない。本地域において時期的に須恵器の普及度合を認識していないことであるが、本遺跡に1片の須恵器の出土例を照らし合せ、これを山陰の編年にあてはめてみると、須恵器第4期以降に相当するとみてもよいかも知れない。これは既に本稿で弥生上器と認識したものととり除いていえることであって、中には古式上師器を誤認しているものもあるかも知れない。今後の地域資料の蓄積を待って再考せねばならない問題もあるろう。

弥生上器は、後期前半に位置付けられる様相をもつ。つまり口縁端部が広くなり、その外面に3~4条の凹線を施しているのである。また胴部に刷毛目が顕著なものも散見され、頸部のくの字形もどちらかといえば、短く屈折している傾向がある。内面は窓で頸部まで削り、胎土はきめ細かくて淡橙色を呈している。こうした様相の土器を数片の土器から、編年にあてはめることは無理であるが、Ⅷ期<sup>②</sup>に位置付けられると考えられる。しかし1片であるが、前期の所産とみた土器のゆくえはどのように捉え関連付ければよいのか、やはり問題がまだ残る。これは層位的に抑えることができなかつた本遺跡の性格でもある。

顕著な特徴をもたない数片の縄文土器から時期を言及することは難しいが、石器類が供件性をもつものと捉えたなら、その石器からある程度の編年的位置付けができるようである。その右器類は、石器とみなした総数56点で、重量8,046g、1点当り約143gとなる。143gといえば剝片を含めた上の数字であるから、どちらかというと重量に値するだろう。この重量は、剝片でも無加工剝片が大型化している傾向から生じたもので、その剝片は打製石斧製作時のものとして捉えられる。つまり、その無加工剝片が重量を押し上げているようで、またその剝片を再利用した様子が顕著に認められない。こうした傾向は、該地域では縄文後晩期（それ以前は軽量となる）にみられる特徴で、打製石斧製作期との関連があると思われる。

また縄文後晩期でも特に晩期になると、石材でも安山岩質のものが使用されるもののガラス質安山岩（一応冠山産として捉えておく）がすくなくなっていく傾向がある。これは本遺跡でも認められる傾向で、それに比例し打製石斧が多出するという特徴も見い出される。本遺跡では10点余りが検出されており、したがって該地域の様相を踏まえて参考するならば、縄文後晩期でも、晩期に近

い特徴を表出しているものと想定したい。

木器は本遺跡の立地的性格上からある程度の検出をみたが、人工遺物と断定できるものは少ない。また加えて、垂直分布の不的確さ（概括的層位から）は時期の断定を弱めているため、人為的遺物としても層序的に的確な時期を示しているとはいえない。それは1層下位に貨鉄や木器・陶磁器などが層序に合致しないまま出土した状況からも把握できる。

しかし個々の遺物を見ると、注意されるものもないではない。例えば石鍤の出土は既に縄文時代に本地区周辺で川漁が行われていたことを証明し、その技は上鍤にも見られるように、引継がれていったことを物語っている。また高麗青磁の検出も、該地の地域的環境とともに捉らえていく上にも少なからぬ影響をもたらす遺物であった。打製石斧においては点数のみならず、形状・技法ともに優れたつくりが見い出せ、当時の人たちの力の入れようが偲ばれ、これらも1つの地域特色を顕わしているのかもしれない。

### 3. 遺 物 と 立 地

本遺跡の遺物は、紙祖川の数次の溢流によって、上方の散布地からの漂着堆積したものと推定される。そのため複合堆積し、しかも上下関係が逆転するなどの層序位置に搅乱がみられる。これは至近に存在した数遺跡の現地点での距離差が影響し、これが数次による溢流によって生じたものと推考できる。

それは土師器が比較的下位層（4・5層）に嵌入、しかも多出するという事実は当期の遺跡が本地点、あるいは最も至近に存在していたことを意味するものであり、また東面（紙祖川）の上層部に出土した縄文土器などは後代に漂着堆積したことを裏付け、これらとの同時期の石器類は重量によって泥土層（5層）に沈在したということが想像できる。こうした成因の根拠は、可視範囲の2地点で数点の遺物を採集したことによって証明できそうである。

つまり、本遺跡の西南西150mの「家の上」地点で1点の縄文土器が採集されており、そこは山裾が舌状的に派生し微高台地を形成している地点で、その端部を旧河道が四周するという立地にある。また南西300m地点の「畠敷田」地点では、圃場整備後の土中から数片の弥生土器が採集されているのである。

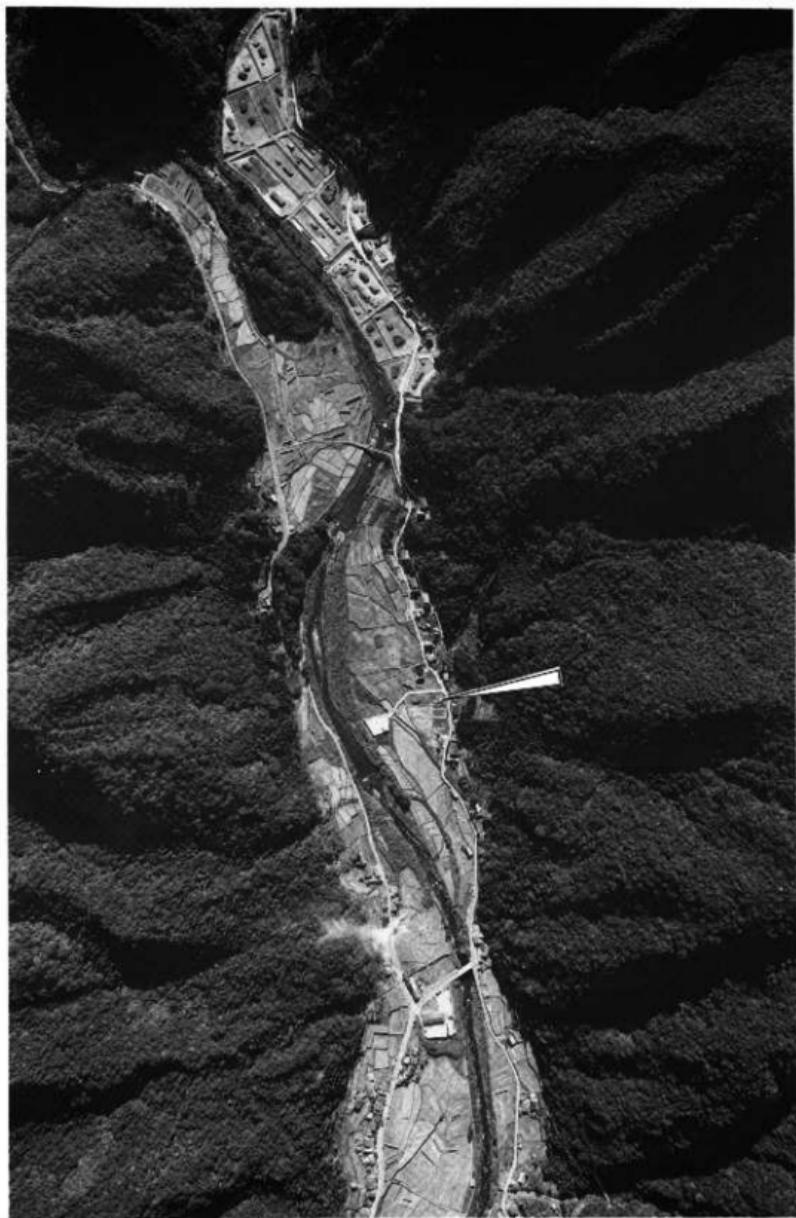
したがって本遺跡は、氾濫原の下流に位置し、その渦状に立地した湿地遺跡であるといえる。

（渡辺友千代）

◇注(1) 山本 清 「山陰の土師器」「山陰文化研究紀要」6号鳥根大学 昭和40年

◇注(2) 佐原 真編『弥生土器』「山陰」 ニューサイエンス発行 昭和58年5月

◇注(3) 森 清氏 所 藏



前田遺跡と周辺地形の鳥瞰(ワールド航測提供)

図版 2



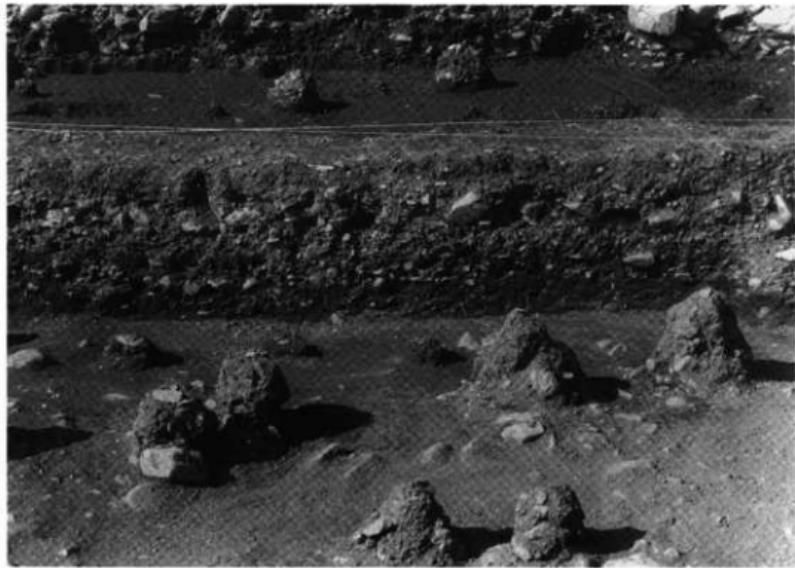
1. 発掘調査前の遺跡全景(西側から)



2. B区除草作業風景



1. 西側から B区地点を遠望(手前の田地は A区地点)



2. 遺物出土状況(B3壁側から中央ベルトを挟んでB1壁側方向)

図版 4



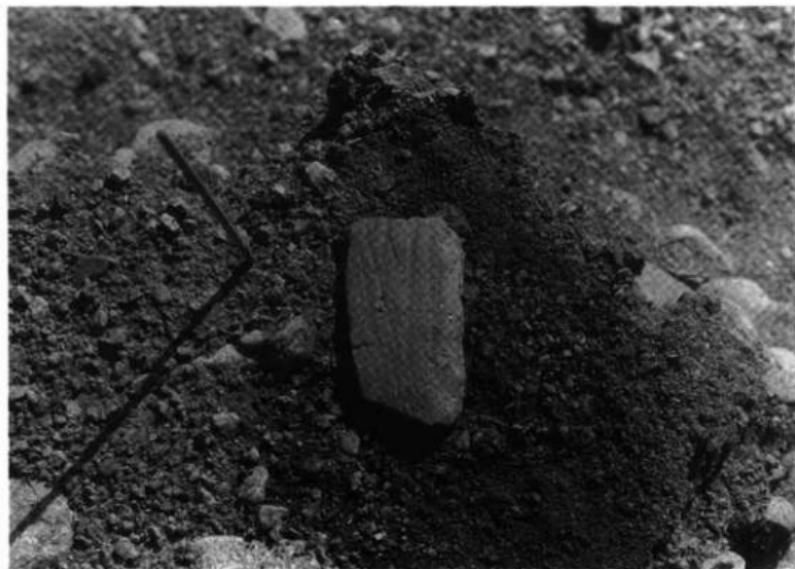
1. 作業風景(B6壁からB9方向を見る)



2. 作業風景(B2壁からB1地点を見る)



1. 打製石斧出土狀況



2. 縄文土器出土狀況

図版 6



1. B1地点側からB2地点を見る



2. B2地点からB1地点を見る



1. A1区(南側から)



2. A2区(南側から)

図版 8



1. A3区(南側から)



2. B区のB1壁

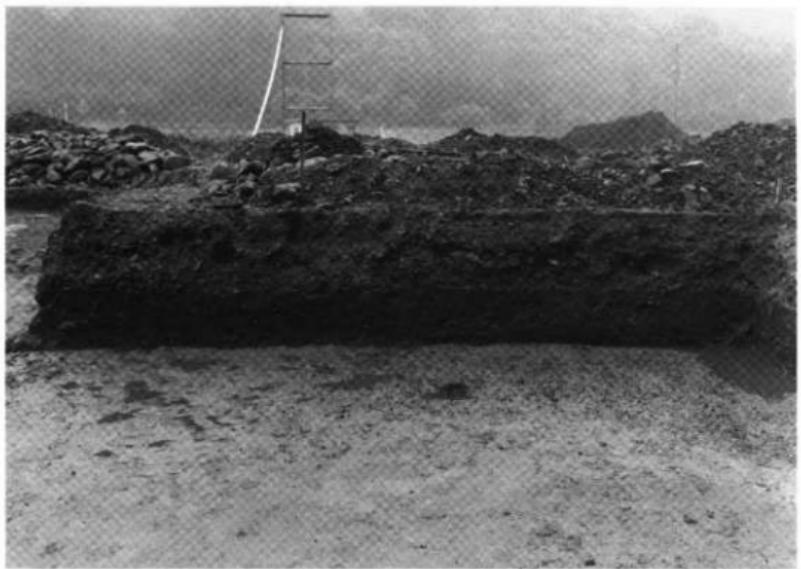


1. B1区砂礫層(B2壁を見る)



2. 雨による浸水状況

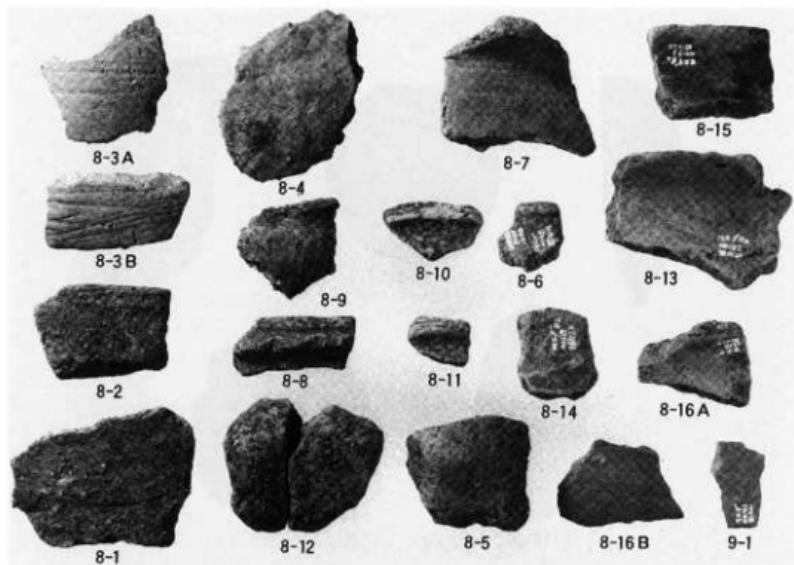
図版10



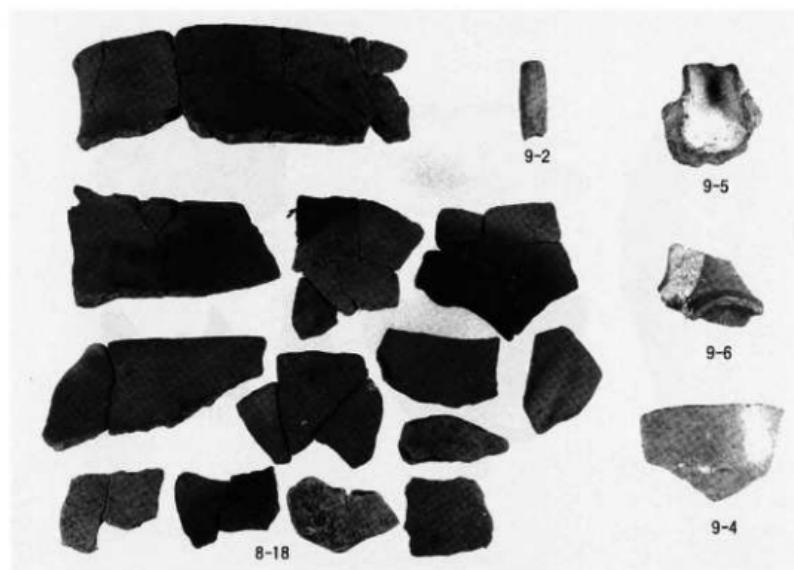
1. B1地点のB9壁



2. B3壁からA1壁方向を見る(南東から)

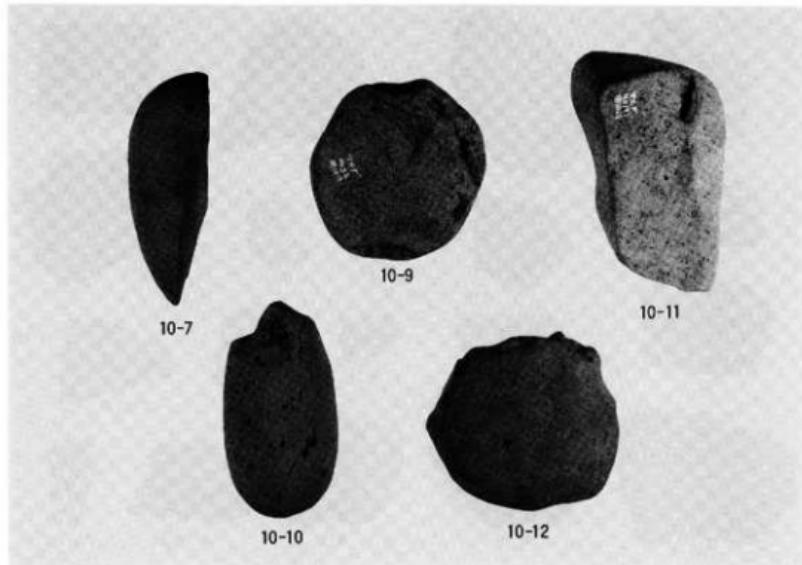


1. 繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器

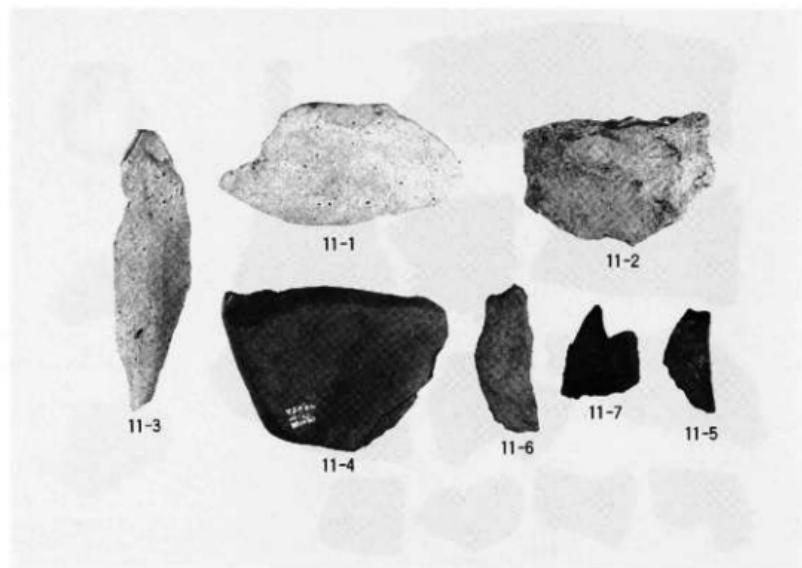


2. 土師器、土錘、陶磁器

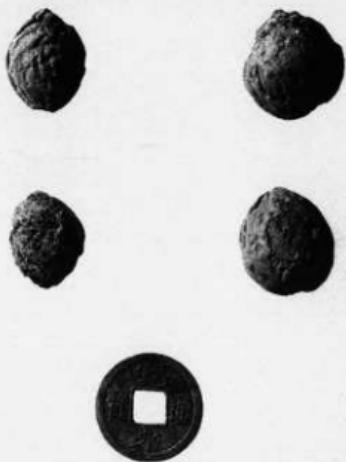
図版12



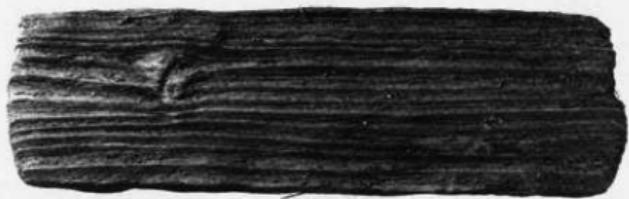
1. 石器



2. 石器



1. 木札、種子、貨錢



2. 木器



---

平成元年3月20日 印刷  
平成元年3月31日 発行

昭和63年度 四見地区県営圃場整備事業に  
伴う遺跡発掘調査報告書Ⅱ

発行 四見町教育委員会  
島根県美濃郡四見町41260

印刷 有限会社 谷口印刷  
島根県松江市母立町89

---